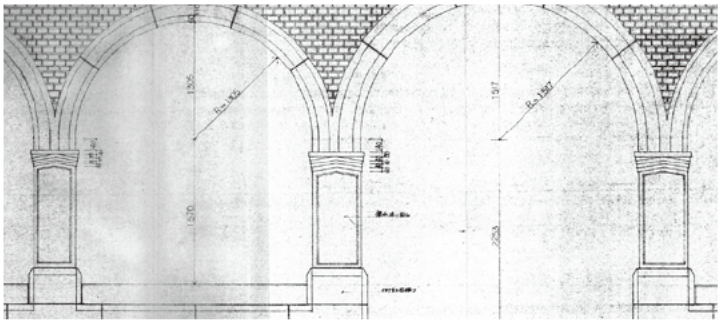
兼松記念館（旧館）



実測図（板倉建築研究所大阪事務所（1976年）より転載）

コラム2

旧兼松記念館について

特命講師　小代 薫

旧兼松記念館をご存じだろうか。経済経営研究所の前身、商業研究所の施設として、野崎通の旧神戸高等商業学校キャンパスの一角にかつてあった名建築である。設計は京都大学建築学科教授の武田五一。兼松商店の寄付により1921年4月に竣工した。

時は、大学昇格運動の真っ只中の頃。キャンパスデザインについても文部省の方針により大きな格差があった。帝国大学や東京の学校では、予算も恵まれ外観重視の方針の下、当時流行した正統ネオゴシック様式の煉瓦造建築が印象的に配置され、眩くその格式や威厳を放っていた。しかし地方の学校となれば、経費削減・機能（採光）重視の方針の下、簡素な木造校舎の並列配置が定型化していた。神戸高商も例外ではなくその印象の違いは誰の目にも歴然だった。一人の建築家に切実な思いがぶつけられていたと想像するが、彼はそれにどう応えたのか。

兼松記念館（中庭）

この建築については、いちはやく鉄筋コンクリート造を採用した点も注目できる。しかし最大の見どころは、ロの字型に中庭を囲むように研究室14室、記念室、集会室、事務室、二層吹き抜けの書庫、閲覧室、食堂、配膳室を2層に配することで、外界とは遮断された静謐な中庭を作り、中庭に向けて半円形のアーチが連続するロマネスク様式の回廊を巡らすことで、求心性がある内側空間を作り出したことではなかったか。一方外観は単純明快な面と線で建物外形を構成し、正面は巧みにシンメトリーを崩すことで、格式ではなく闊達さを表していた。

大学の起源は中世修道院だといわれ、その様式はロマネスクで回廊と中庭を持った。だからそれをここに選んだのに違いない。ロマネスク様式は、この6年後、一橋大学の兼松講堂で大々的に採用され一世を風靡する。さらに5年後には神戸大学の六甲台本館、そして現・兼松記念館、出光佐三記念講堂へと受け継がれる。これら相互の影響は無視できない。建築デザインの点でも旧館の果たした役割は大きかったといえる。

シュラスコ

教授　濱口 伸明

兼松記念館と経済経営研究所新館の間の中庭は、普段は人通りが少ない静かな空間だが、年に1度賑わいが訪れる。6月の当研究所教授会が開かれる日の夕方、研究所僚友会が開催する恒例の「シュラスコ」だ。シュラスコとは串に刺した牛肉の塊を焼くブラジル風バーベキューのことである。この習慣の始まりは、1957年3月から3年間当研究所に在籍し、中南米研究部門の設立に尽力した斉藤広志氏（宮崎県に生まれ、幼少期に両親に伴ってブラジルに移住し、サンパウロ大学を卒業。ブラジル日系人社会の社会学研究の第一人者となった。1960年に神戸大学から博士号を取得し、サンパウロ大学コミュニケーション芸術学部教授）が紹介したものだとされている。毎年、僚友会幹事のこだわりを発揮した料理がふるまわれ、教員と職員が楽しいひと時を過ごす。童心に帰って輪投げゲームを楽しむのも、研究所シュラスコの伝統になっている。